

と き 時代を映して、 川は流れる。

文：小田豊二

川があった。

そのゆったりした流れに乗るでもなく、小舟が葦の間に間に漂っていた。

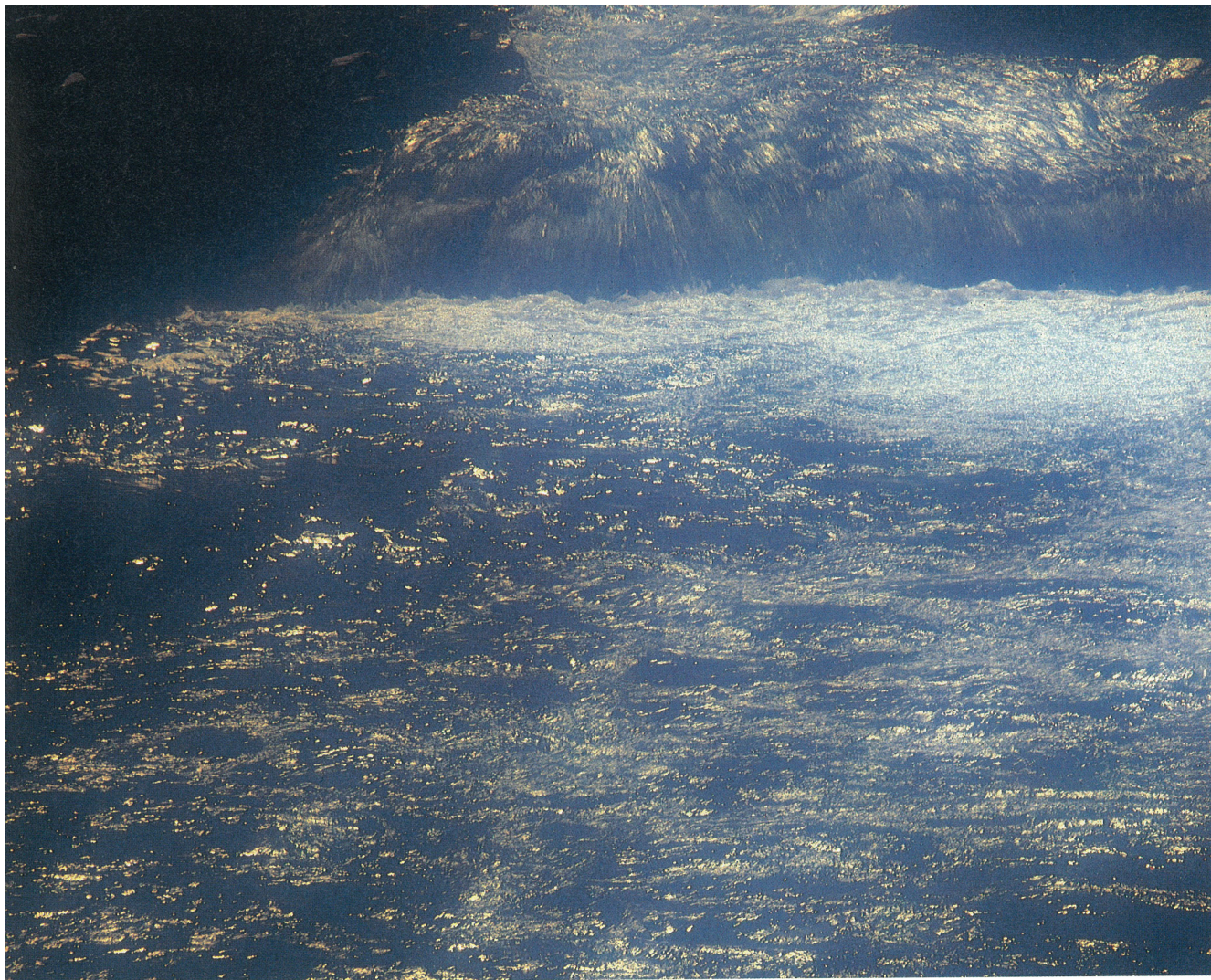
春だった。岸辺の桜の花びらが小雪のように舞っていた。ひとひら、ふたひら舟の上でひばりの声に耳をすましている少年の胸に花びらが舞っていた。

少年は、ゆっくりと上半身を起こすと、遠く霞の向こうを見ようと目を細めた。頭にまた花びらが踊るようにしてとまった。

もやった先に屋根舟が見えた。

時折、嬉声が聞こえた。そのたびに小舟が大きく揺れたような気がした。

寛文二年、のちに芭蕉と呼ばれた少年は、春の日射しを身体じゅうであびながら、舟の



上で大きく背伸びをすると、気持ちよさそうに川風を胸いっぱい吸いこんだ。

ある日、青年は川の流れを見ていた。

いや、正確にいうと、そうではない。ただ目の前を通る水を見つめていた。

（水は自由でいい。自分でこうなりたいとかいう気持ちがないから、好き勝手に流れている。淀みに少し身を休めている水もあれば、勝手に石にぶつかって後戻りしている水もある。自由だから、こんなに澄んでいられるのかい）

青年は浅瀬に手を入れた。

（おや、下の方がかなり早い流れだな。水は波立っている上の方ばかりじゃないんだ）

表面の水は夏の光を写しこんで明るく光っているが、深層は暗く、冷たいのを知った。手をぬき、腕を振り、水滴を再び川に戻すと、青年は時の過ぎゆくのも忘れ、楽しそうに川をのぞきこんでいた。



私はこういうふうに旅をしてみたかったと
芭蕉は言った。

無能でもいい、無策でもいい。ただ旅を続けること、それが生きているということなのだ。

家庭もなければ、財産もこれといって持ち合わせていない自分が生きている理由は「自由」でしかない。

庵を結ぶのも仮の住まい。

そう言いかけて、芭蕉は少年時代、青年時代にじっと見つめた川を思い出した。

あの水の流れのように生きることができたなら……。

その時、芭蕉の「奥の細道」の旅は、すでに終ろうとしていた。

月が川を照らしていた。

黒い水の東が闇になったり、黄金になったりしながら右に左に揺れていた。

その金の水の衣を縫うように舟が進んでき



た。櫓音がかすかな悲鳴をあげ、月の光の下にはつきりとその形を見せはじめた。

舷（ふなばた）を背に数人の男たちがじつとうづくまっていた。彼らの中心に、白木の箱があった。

誰も黙っていた。

ただ船頭の口ずさむ節と、それに合わせた櫓の音が低く、まるで川の底を流れる水のように暗く重かった。

しばらく黄金の光を浴びていた白いお棺は頭の方から闇に溶けていった。

そして、何も見えなくなった。

川があった。

春があった。光があった。

花が舞った。しぶきがあがった。

やがて、病葉をそっと川下に送った。

川があった。

時を乗せて、ただゆったりと

川は流れていた。